加藤雅志先生を偲んで

本ガイドラインを作成中の 2021 年 6 月 11 日にガイドラインの作成委員のおひとりであった加藤雅志先生が急逝されました。

加藤先生は，お若いながら日本サイコオンコロジー学会の主要メンバーのおひとりであり，理事として長年ご活躍してこられました。彼はその人柄と実行力から，学会員のみならず多くの関係者にとって何人にも代えがたい存在でしたので，その喪失の大きさは筆舌に尽くしがたいものがございます。個人的には本ガイドラインのみならず多くの仕事を通しての，まさに盟友とも呼ぶべき存在でした。今回のガイドライン作成の母体になった厚生労働科学研究費補助金・がん対策推進総合研究事業「がん患者の家族・遺族に対する効果的な精神心理的支援法の開発研究」班の研究者としてご活躍いただいておりましたが，加えて，私が代表を務めていた令和 3 年度開始の厚生労働科学研究費補助金・がん対策推進総合研究事業「AYA 世代のがん患者に対するスマートフォンによる医療・支援モデル介入効果の検証」にも参画していただいておりました。加藤先生の能力と熱意と責任感，そして誠実なお人柄から，大切な研究班などの仕事ではいつも加藤先生にお力添えいただいておりました。

思えば，私が加藤先生に初めてお目にかかったのは，彼がまだ慶應大学の学生だったころ，将来サイコオンコロジーや緩和ケアを専門にしたいと，当時私が勤務していた国立がんセンターを彼が訪問されたときでした。医療や医学に対する想いを熱く語られた加藤先生の姿は今でも鮮明に覚えています。その後もことあるごとに会ってはさまざまなことを語り合って来ましたが，特に記憶に強く残っているのが，彼が医系技官として厚生労働省に着任されていた時期です。加藤先生は毎日深夜に及ぶ激務をこなされながらも，日本のがん医療の在り方を真剣に考えておられました。当時緩和ケア普及のための地域プロジェクト（OPTIM）が実施されていましたので，緩和ケアに従事される多くの医療者の方も彼と一緒に仕事をされていたかと思います。その後は国立がんセンターに移られ，冒頭でご紹介したようにさまざまな仕事をご一緒させていただきました。ご無理をお願いしても，最後にはいつも明るく「わかりました，私でよければお引き受けさせていただきます」と言ってくださった加藤先生の言葉とそのときの表情が忘れられません。お亡くなりになられた 6 月 11 日の前日の夜にもこのガイドライン作成に関してのオンラインによる班会議でご一緒させていただいておりました。職場でご逝去されたと翌朝連絡をいただいた際には驚きのあまり現実感がわきませんでした。私どもの度重なる無理なお願いが加藤先生に激務を強いることになり，結果的にお身体の負担につながったのではと申し訳ない気持ちがよぎります。

何より，ご家族がおつらいことと思います。お気持ち，いかばかりかとご心中を拝察し，申し上げる言葉もございません。

今回の出来事は，遺族ケアガイドラインを作成している時期においてのことでした。何か特別な意味があるのではないかとすら考えてしまいます。加藤先生の願いの一つは，きっと本ガイドラインがよいものになり，多くの方に役立てることができることかと拝察いたします。いずれにしましても，本ガイドライン作成に加わってくださっていた加藤先生のご遺志を一同で受け継いで参りたいと思います。

©日本サイコオンコロジー学会／日本がんサポーティブケア学会，禁無断転載，発行：金原出版

加藤先生から学ばせていただいたことの一端を記し，感謝の言葉に代え，ここに先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学分野
明智龍男

加藤雅志先生の御略歴

加藤雅志先生は，1999 年に慶應義塾大学医学部をご卒業され，東海大学，埼玉県立精神医療センターおよび埼玉県立がんセンターなどを経て，2006 年から厚生労働省健康局総務課がん対策推進室（当時）に勤務されました。2009 年からは，国立がんセンターがん対策情報センターに異動され，以降，わが国のサイコオンコロジー，緩和医療の発展にご尽力されました。

©日本サイコオンコロジー学会／日本がんサポーティブケア学会，禁無断転載，発行：金原出版